奥豊後の旅に参加して嬉しかったこと

上杉　清喜
（会員・佐伯市中川原区）

「上杉さん。採ったらいけん。採ったらいけん」
と哀願するように、また、諭すように、しかも遠慮深げに、なんとも爽やかな響きの制止ぶり。無理もない。顔付の悪いのが、馬耳東風の体で目的物に近づいて行くのだから。それをてっきり引き抜くと思ったのであろう。可憐な「やまりんどう」を。

十月二十五、六の両日にかけて、紅葉と史跡を訪ねて三重・竹田方面への旅に加えさせていただき、久住高原の一隅に歩を印した時のことである。天愈々高く、気益々清澄。高原の秋は正に酣。遥かに黒岳・大船・中岳等々名にしおう山々を遠望すれば、浩然の気いやがうえにも湧き起こる。近く遠く牧牛の草を食む様、正しく生ける絵画である

その絵の中に一人溶け込んでいた矢先、女性衆の会話の中に不図耳にした「りんどう云々」の声。そのりんどうを見たいばっかりに近づいて行ったのであった。絵では知っていたが、未だ野生の本物を見たことがない。是非、一目確かめたいものと思ってのことであった。強靱な雑草の中にあって、目立たない淡い紫色の可憐な花、楚々としてひっそりと、何とも気に入った花である。

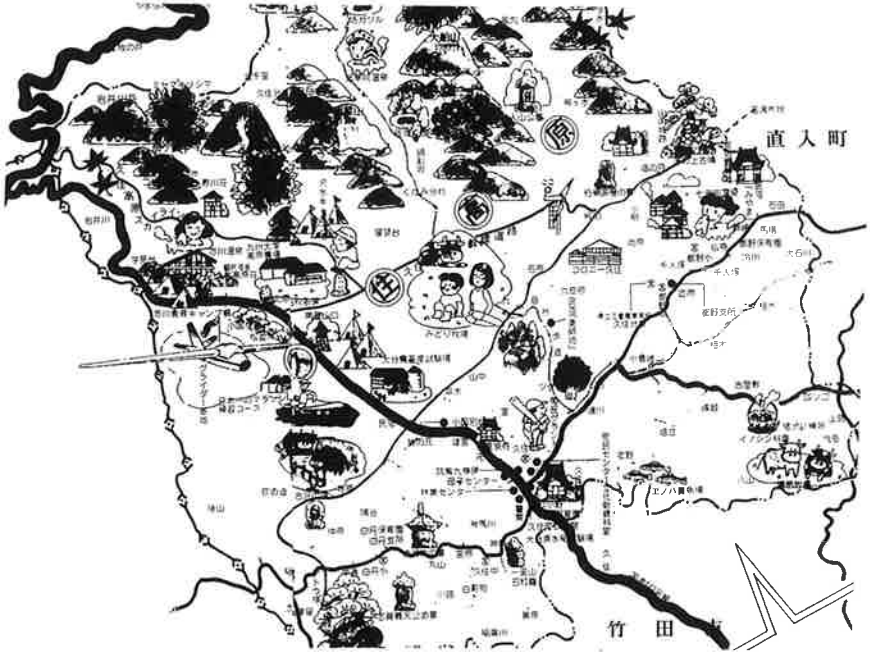
近年、会の催しには無沙汰続きであるが、ひところはよく仲間入りさせて貰い、山野を歩き回ったものだ。当時、ビニール袋等々、用意おさおさ怠りなく盛んに活躍（？）していた同志（それが女性軍に圧倒的に多かったように思う）を、いささか苦々しい思いで、横目で見たのは一、二回ではなかったような気がする。そして、しばらく仲間入りを休んでいたが、この間、事態は逆転、時に白い目を投げていた、その女性軍に厳重注意を受け

た。

復員後、一年生から始めた百姓も、もうかれこれ四十有余年になる。それは、米を作り、みかんを育て、木を植えることであった。天を父となし、地を母となして、生命あるものを作り出す仕事である。一本の野草といえども皆夫々に大自然の恵を受けて、生の営みを続けている。仕事柄その生命をいとほしむ心は、年のせいも加わって、年一年増して来たように自分なりに感じている昨今である。

「やはり野に咲けれんげ草」

石仏（ほとけ）は野にあってこそ、れんげ草は田に咲いてこそ美しい。

ともあれ、女子衆（おなごし）におこられて？嬉しい一日であった。

高原にわが手折り持つ
竜胆の
露けき花に蜂こもりをり
結城哀草果